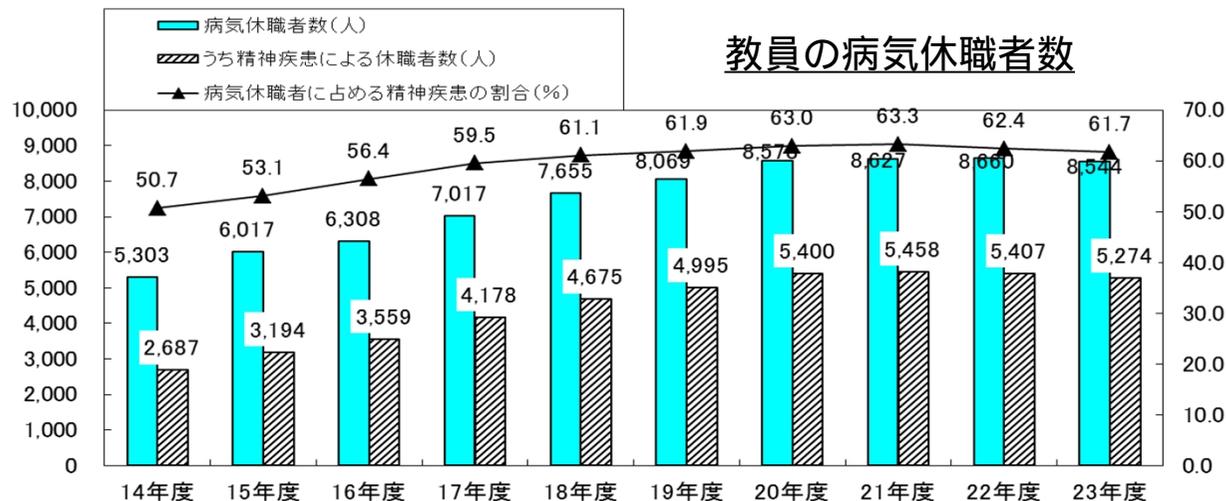


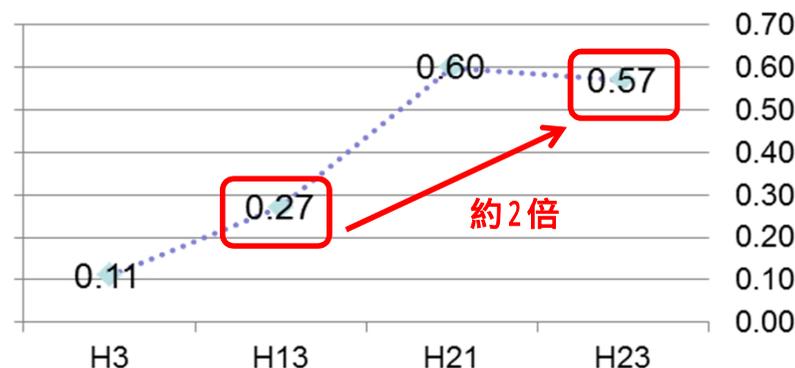
1. 教職員のメンタルヘルスに関する現状と課題

学校教育は、教職員と児童生徒との人格的な触れ合いを通じて行われるため、教職員が心身ともに健康で教育に携わることが重要。精神疾患による教員の病欠休職者数はH23年度に約5,300名となり、依然として高水準にあり深刻な状況。
(在職者に占める割合は約0.6%となり、最近10年間で約2倍に増加)

教職員のメンタルヘルスの現状



在職者に占める精神疾患による病欠休職者の割合



年代別の割合

→ 40歳代、50歳代以上が高い

学校種別の割合

→ 中学校、特別支援学校が高い

条件付採用期間における精神疾患を理由とする離職教員数

→ 病気を理由とした依願退職者の約9割 (H23 公立103人)

精神疾患による休職教員数と配置期間の関係

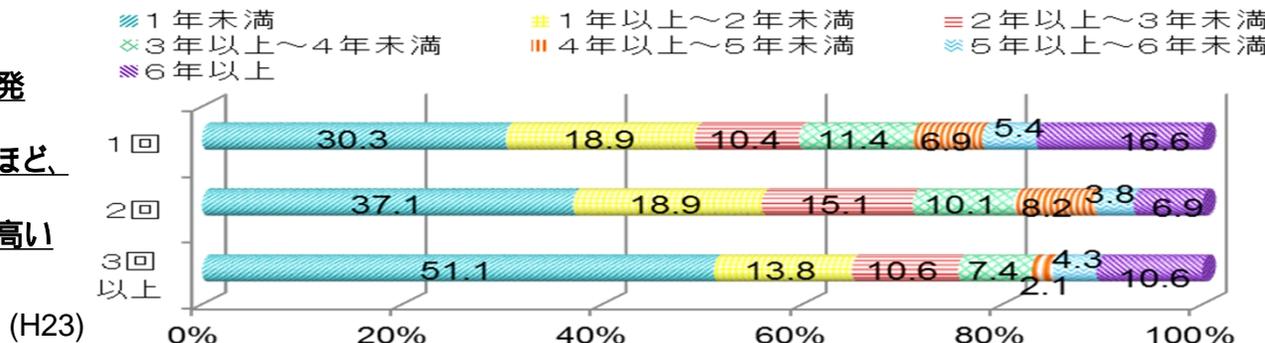
→ 精神疾患による休職教員の約半数は、所属校配置後2年以内に休職 (H23 公立2,384人)

復職支援施策の重要性

1年以内に精神疾患を理由として再度の休職となった者

→ 精神疾患による休職教員の11.8%を占め、減少傾向にはあるものの、依然として1割強 (H23 公立625人)

精神疾患を再発する者は、回数を重ねるほど、短期間に再発する可能性が高い



2. 教職員のメンタルヘルス不調の背景等

業務量増加や質の困難化、教諭間の残業時間のばらつき、校長等とその他の教職員との間の認識ギャップ等の傾向。教職員の組織や業務の特徴として、いわゆる鍋蓋型組織のためメンタルヘルス対策についてラインによるケアが難しい面や、学級担任や事務職員など教職員が一人で対応するケースが多く、組織的な対応が十分ではない状況。

業務の量と質の変化、職場環境と人間関係

残業時間の増

S41年度調査 約 8時間(平日・休日)
H18年度調査 約 34時間(平日)、約 8時間(休日)



教諭間の残業時間のばらつき (H24調査)

教諭においては、平均退校時間が18時以前の者が18.7%に対し、20時以降の者が15.8%であり、ばらつきが大きい

業務改善に関する認識のギャップ

「業務の縮減・効率化等の改善を図る動き」の肯定的回答：
校長等は約78% ↔ 教諭等約55%、事務職員約67%

職場の雰囲気醸成への認識のギャップ

「教職員同士で協力しあって仕事をする雰囲気」の肯定的回答：
校長等は約96% ↔ 教諭等約87%、事務職員約84%

教職員の健康管理の現状

教職員の健康状態の把握状況に関する認識のギャップ

「上司 部下の健康状態の把握」の肯定的回答：
校長等約98% ↔ 教諭等約77%、事務職員約82%

校長等による教職員のストレス状況の把握

校長の24%、副校長・教頭の約20%は、部下のストレス状況の把握が十分ではないと回答

コミュニケーションの状況への認識のギャップ

「職場におけるコミュニケーションの状況」の肯定的回答：
校長等は約95% ↔ 教諭等約86%、事務職員約86%

教育委員会による教職員の健康管理の状況

・公立学校における労働安全衛生体制の整備状況(H24)は、特に小中学校において未だ低い水準(衛生管理者の選任率:小86.4%・中88.2%、産業医の選任率:小73.4%・中83.4%、衛生委員会の設置率:小76.3%・中82.6%)

認識の
ギャップ

メンタルヘルス不調の要因

学校規模別の特徴

・校長及び副校長・教頭は、保護者対応等に関して、全般的に学校規模が大きいほど、強いストレスが多くなる傾向
年代別(20~50歳代の教諭等)の特徴
・全般的に年代が高いほど、強いストレスが多くなる傾向

強いストレスを感じる割合が高い事項

・校長:学校経営、保護者対応
・副校長・教頭:業務量、書類作成、学校経営、保護者対応
・教諭等:生徒指導、事務的な仕事、学習指導、業務の質
・事務職員:業務の質、業務の量

ストレスを軽減する要因

ストレス軽減に寄与する事項

・教職員としての理想像を有している
・教職員間の良好な人間関係
(上司と相談しやすい雰囲気、職場を離れた同僚等とのコミュニケーションの確保)

